

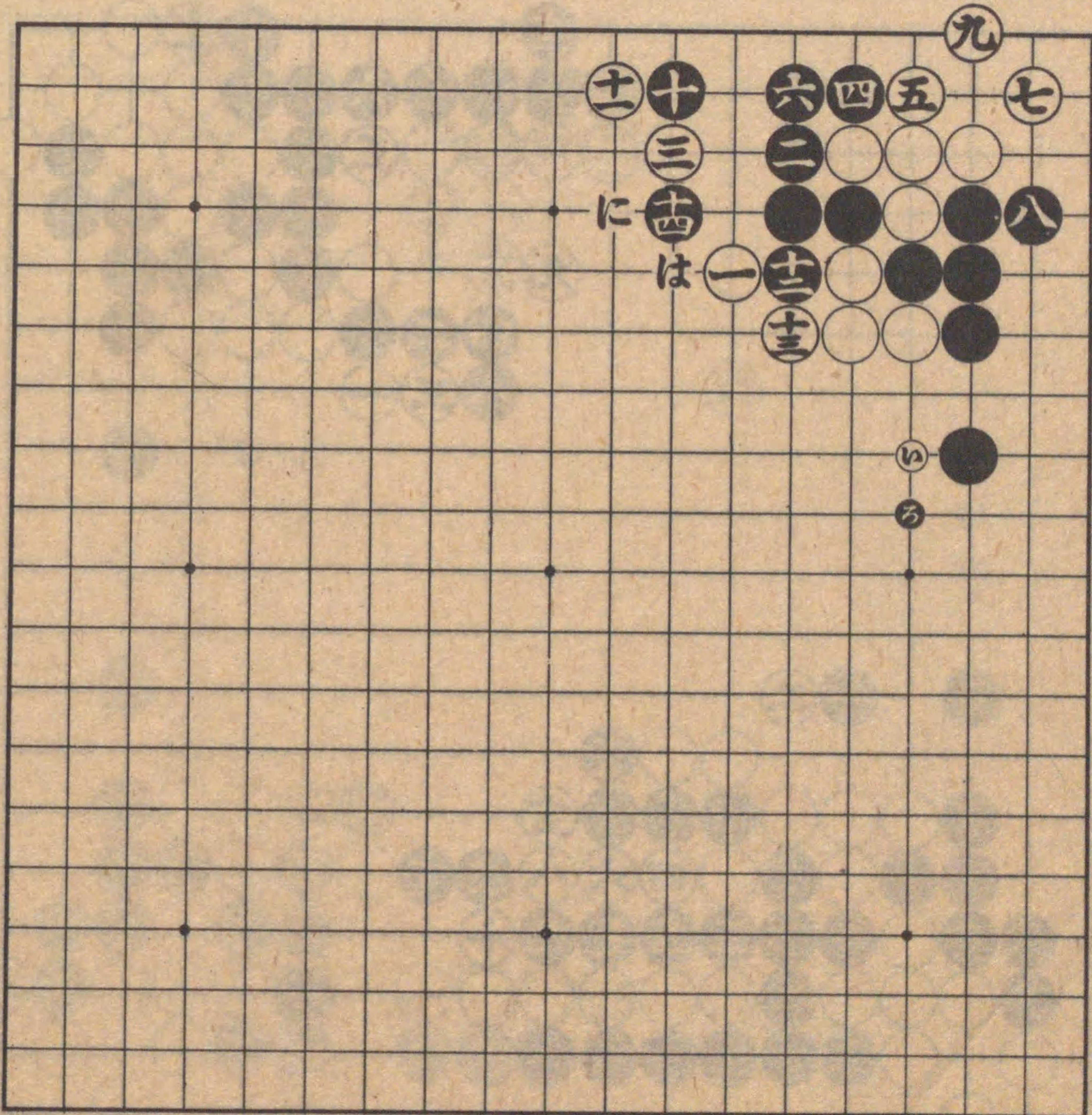
第三百二十九圖 最後に記憶を確

かめ且つ整理す可く復習の爲に本圖を掲げて置きます。

白一、三の高壓手段に對しては黒四、六と綽粘ぐのが最善である。

黒十と頂けた時、白十一と直ちに約へたならば黒は十二を先にして十四と頂越すが宜しい。

黒十に對し白(10)黒(9)を交換してから十一と約へた時にも黒は十二、十四を以て報いて紛れ無い。其の際白は黒にと行出す變化が難解であつたが黒にして誤り無くば白は救ひ難き瘡痕を被つて退かざるを得ない。以上が要點であります。



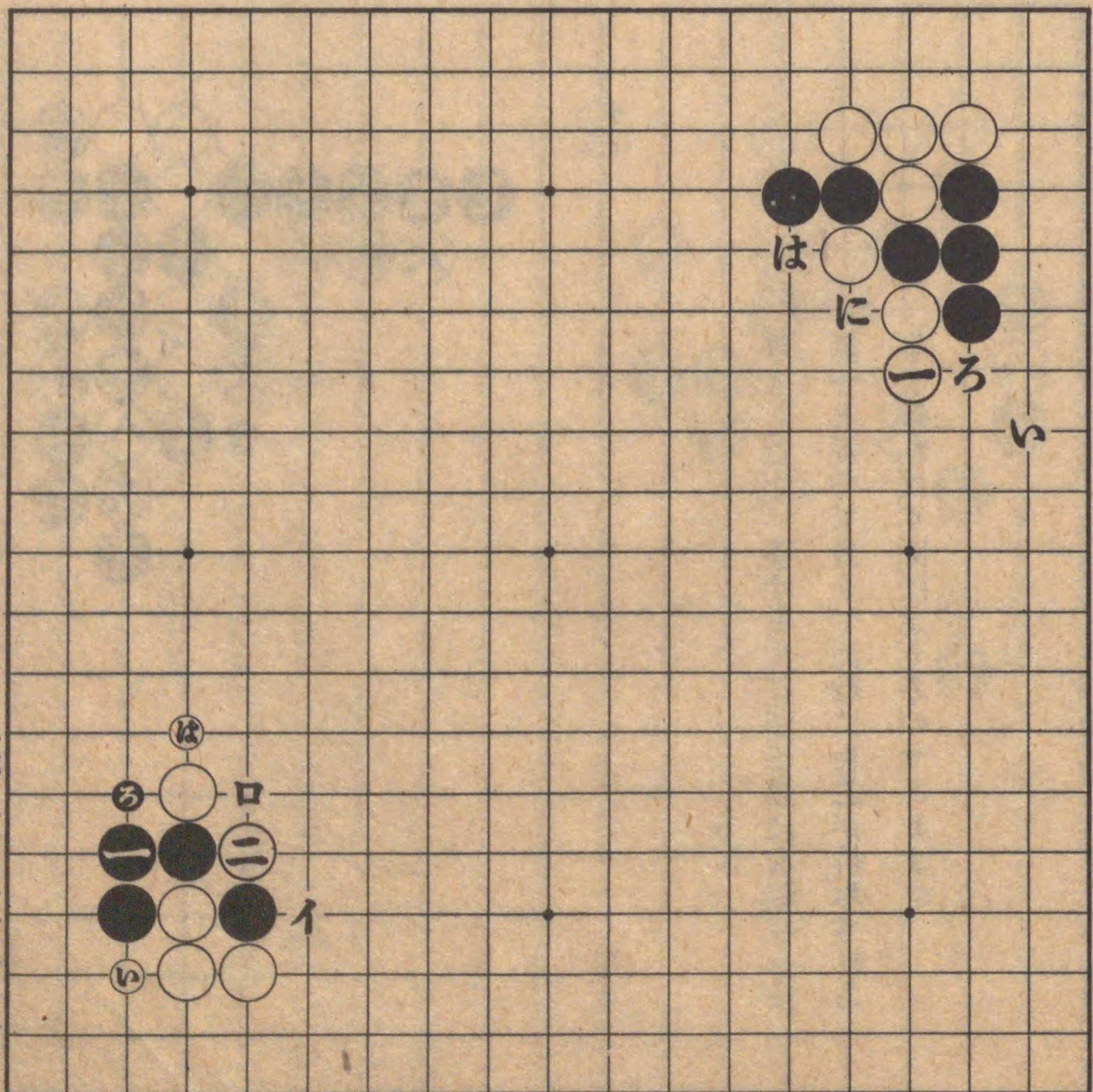
(第三百二十九圖)

第三百三十圖 白一と行出す型に

入ります。これに對する黒の應手はいと走る、ると押す、黒は白にを先にしてからると押す——凡そ三通りを擧げる事が出来ます。所謂『大斜百變』の根幹を成すものは實に此の白一より出發するのである。従つて斯く行出さずに一の手でにの點を粘ぐ從來の型に比し變化の多岐に渉るは已むを得ません。比較的單純なるものから順次解決して行く事とする。

第三百三十一圖 黒一と下を粘ぎ

白二黒イ白(2)黒(3)白(4)と行出される事を避ける可く黒イの手で口を切つて簡明を期し消極的態度に甘んずるか否かは固より大斜定石の當初に決



(第三百三十圖)

(第三百三十一圖)

定さるべき根本方針であります。

第三百三十二圖 先づ黒一と走る。

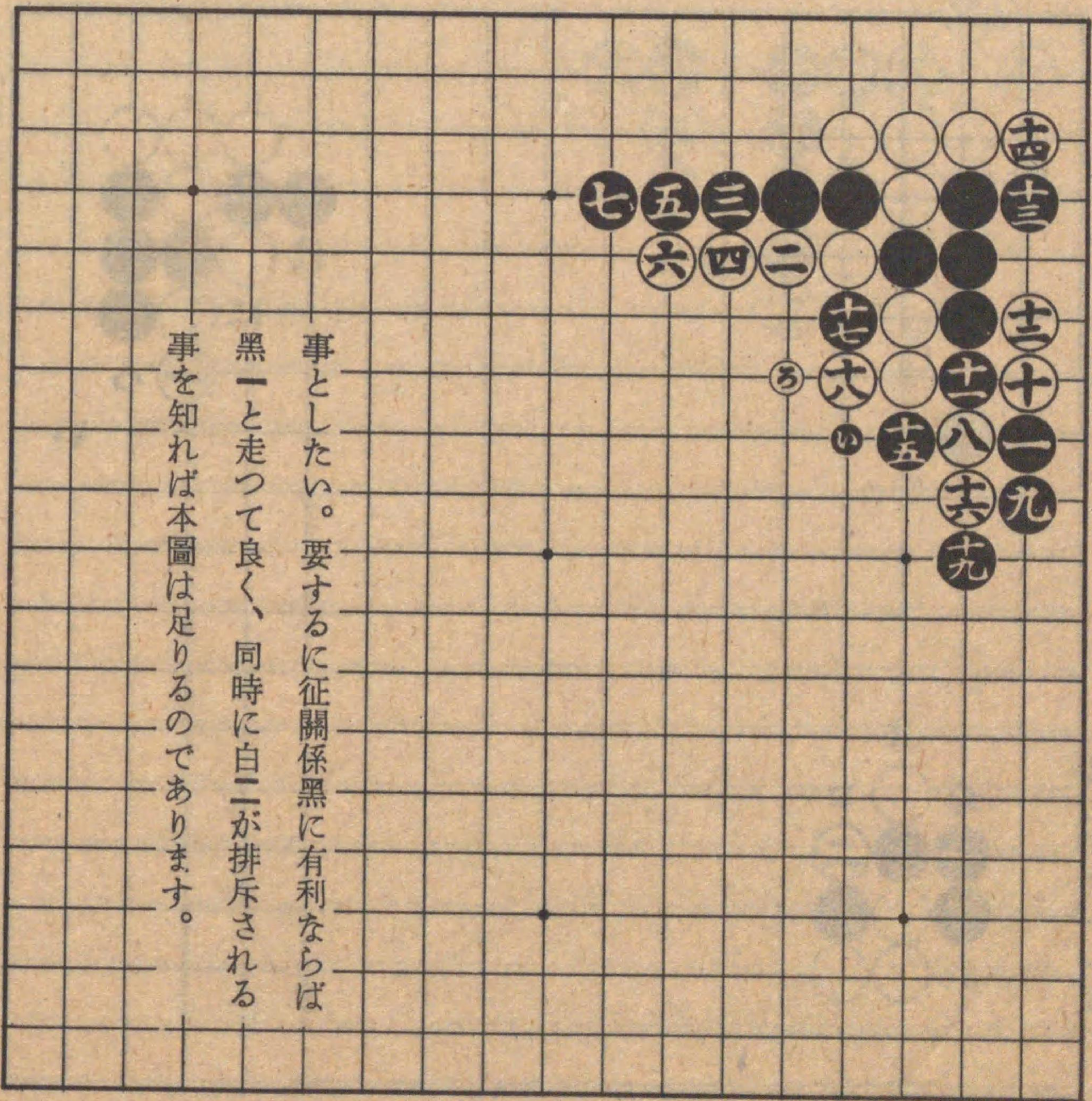
白二と押すには次に示される征關係が初めに確かめられて居なくてはなりません。但し其の點は黒も一と走るに際し、否迦れば前圖に於いて黒一白二と切られた時に既に見定められて居る可きである。

征關係とは白二乃至十八に續いて

黒十九と當てゝの夫れであつて黒(九)と黒十九との先後は關しない。

此の征關係が黒に不利ならば黒九と行出す事は出來ぬ理であり抑々黒一の走りからして考へ直さねばならぬ譯です。なほ白八、黒九、白十等々に就いては後に再検討を試みる

(第三百三十二圖)



事としたい。要するに征關係黒に有利ならば黒一と走つて良く、同時に白二が排斥される事を知れば本圖は足りるのであります。

第三百三十三圖 前述の征關係

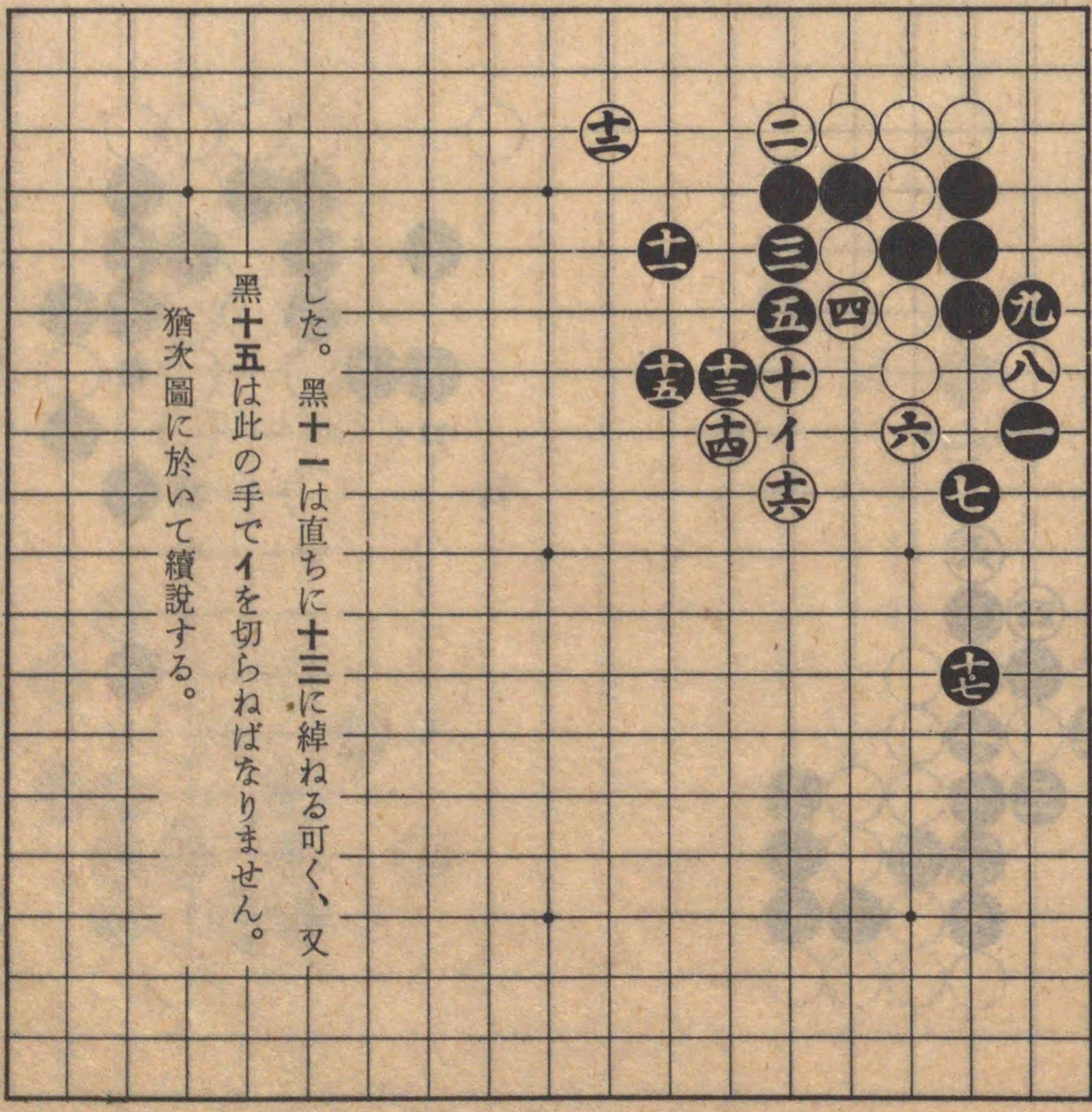
しくは黒一白二と下から押さざるを得ません。黒は三と當て五と押して中原に勢力を加へる。

白六は此の點に黒から頂けられると忽ち形が崩れるので斯く補つて次には八の頂越しを含みました。

黒九に就いては第三百三十五圖に注意する。

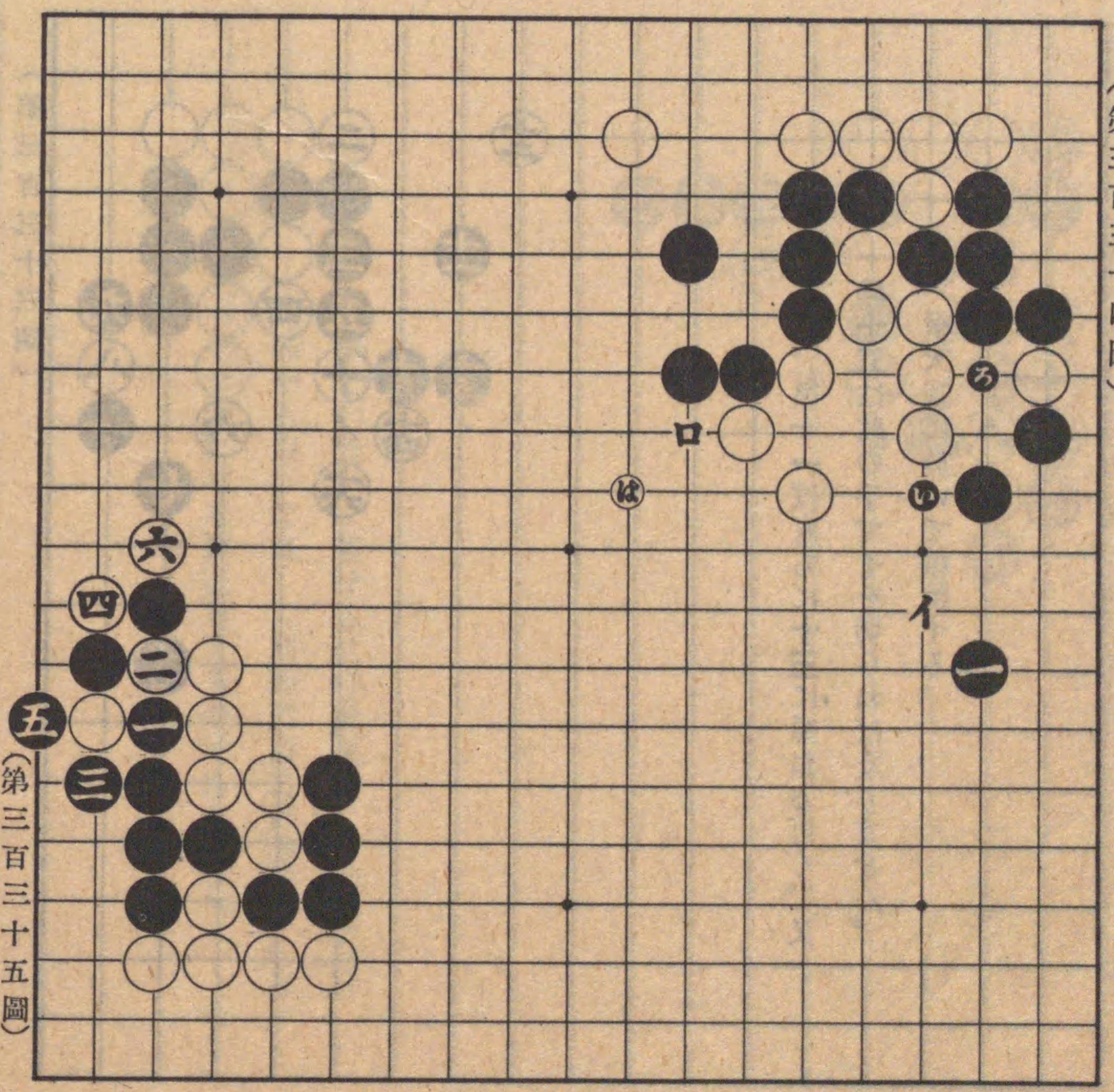
白十乃至十六にて一段落です。定石としては古い型であるだけに難點がある。黒十一白十二の交換が何よりも黒の不利であり、黒は自身の姿勢の整備に重きを置いた爲に上邊に於いて白に實質を占められたのみか白十六まで巧みに治まられて終ひま

(第三百三十三圖)



した。黒十一は直ちに十三に綽ねる可く、又黒十五は此の手でイを切らねばなりません。猶次圖に於いて續説する。

(第三百三十四圖)

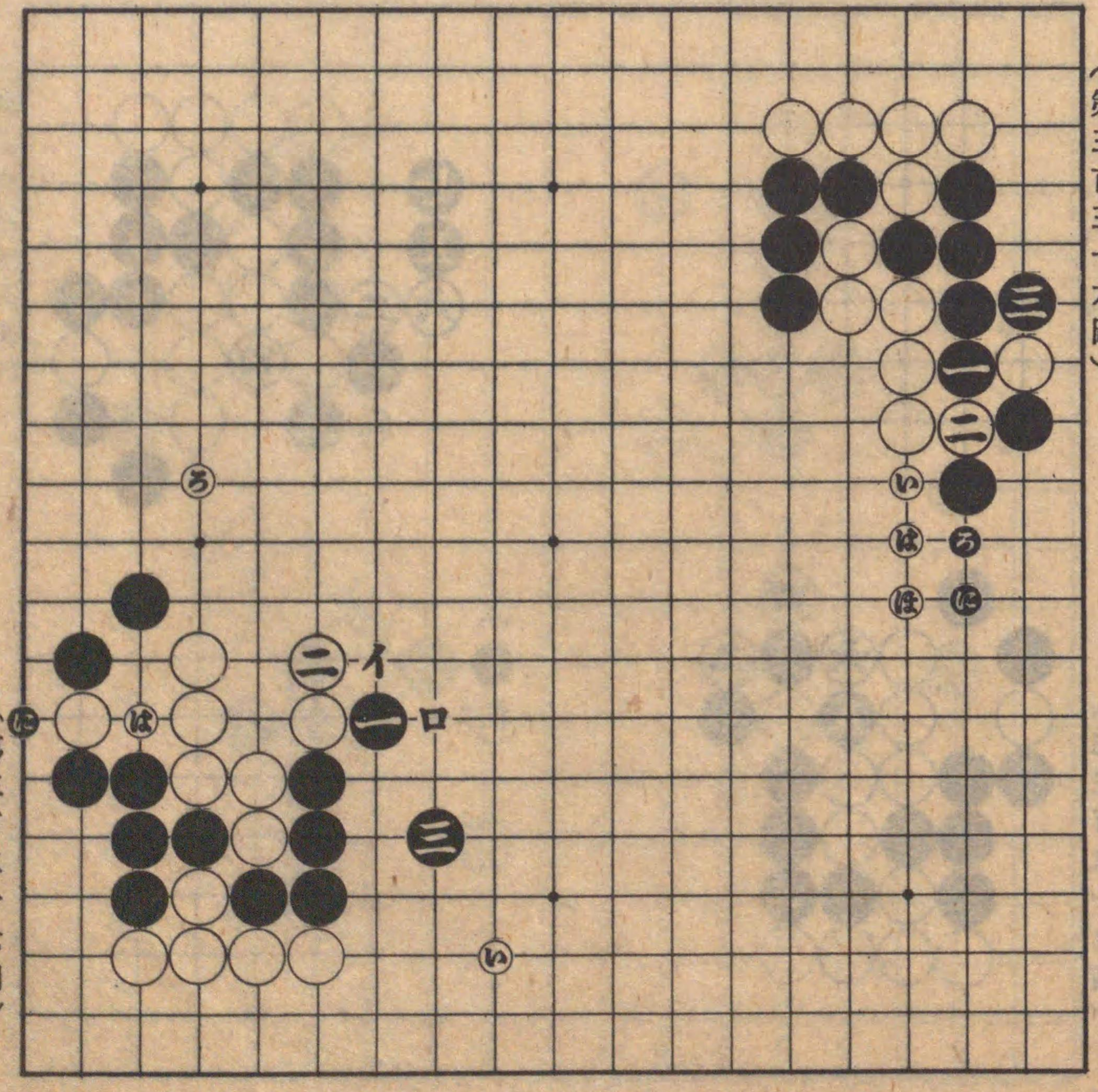


第三百三十四圖 前圖の黒十七を本圖一とする。此の一の手では然し①と押し、或ひは②と遮つて白一子を抱へて置く事も出来ず。何れにせよ右邊を全然手抜すると、右下隅の配置關係にも依りますが白イなどの來攻が嚴しい。

碁黒一に次いで白は③と斜走するか直接口を押すかである。

第三百三十五圖 前々圖黒九の屈服を嫌ひ本圖の如く一と直接遮斷するには白四、六と抱へられる征關係に注意しなければなりません。此の征は恰も第三百三十二圖に於ける黒十九の夫れと全く軌を等しくして居るのである。

(第三百三十六圖)



第三百三十六圖 前圖に指摘された征關係宜しくば従つて黒一の遮斷は成立する譯である。而して白二黒三に次いで白④以下、符號の如く押して打つ碁になります。

第三百三十七圖 第三百三十三圖に於ける黒十一の手で本圖の如くと直ちに綽ねる方が嚴しいのです。

白二は形から觀ても緩著ですが斯く行ければ其の時黒は三と飛んで居ても第三百三十三圖より働きます。即ち白イ黒口を想定し本圖の二が一路上の掛粘となつて居る形と本圖との差に外ならない。本圖黒三に次いで白⑤と拆るか白⑥と迫るか、又白⑦黒⑧を交換して白⑨と迫るかです。

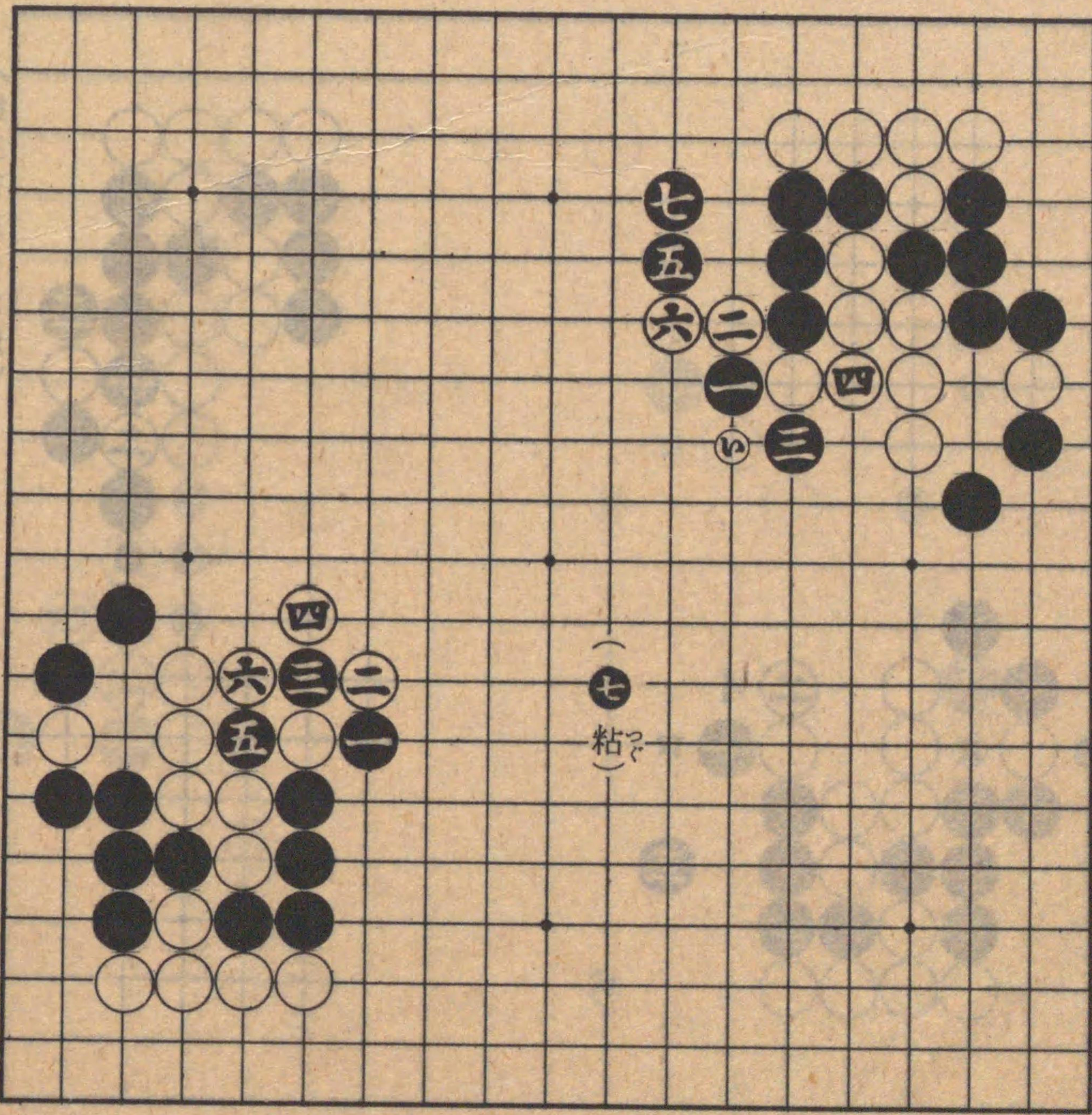
(第三百三十七圖)

第三百三十八圖 黒一と厳しく緯

ねるのが良いと前圖で言つて置きましたが、黒の恐れるのは此處で白二と圖の如く直接に切られる手である。それには然し白も黒三白四と粘がされる愚形を覺悟せねばなりません。而して黒五白六黒七を必然とし、次いで白⑧と切つてからの戦ひとなります。以下は指摘すべき限りでない。黒三と叩く形は痛快の極みなれど右邊にも根據の不安があるので黒に成算無くては一は敢行し得ぬ譯です。

第三百三十九圖 黒一白二と緯返せば黒三乃至七の運びは双方絶對であります。白四、六は言ふ迄もなき形である。黒七に續いて次圖――

（第三百三十八圖）



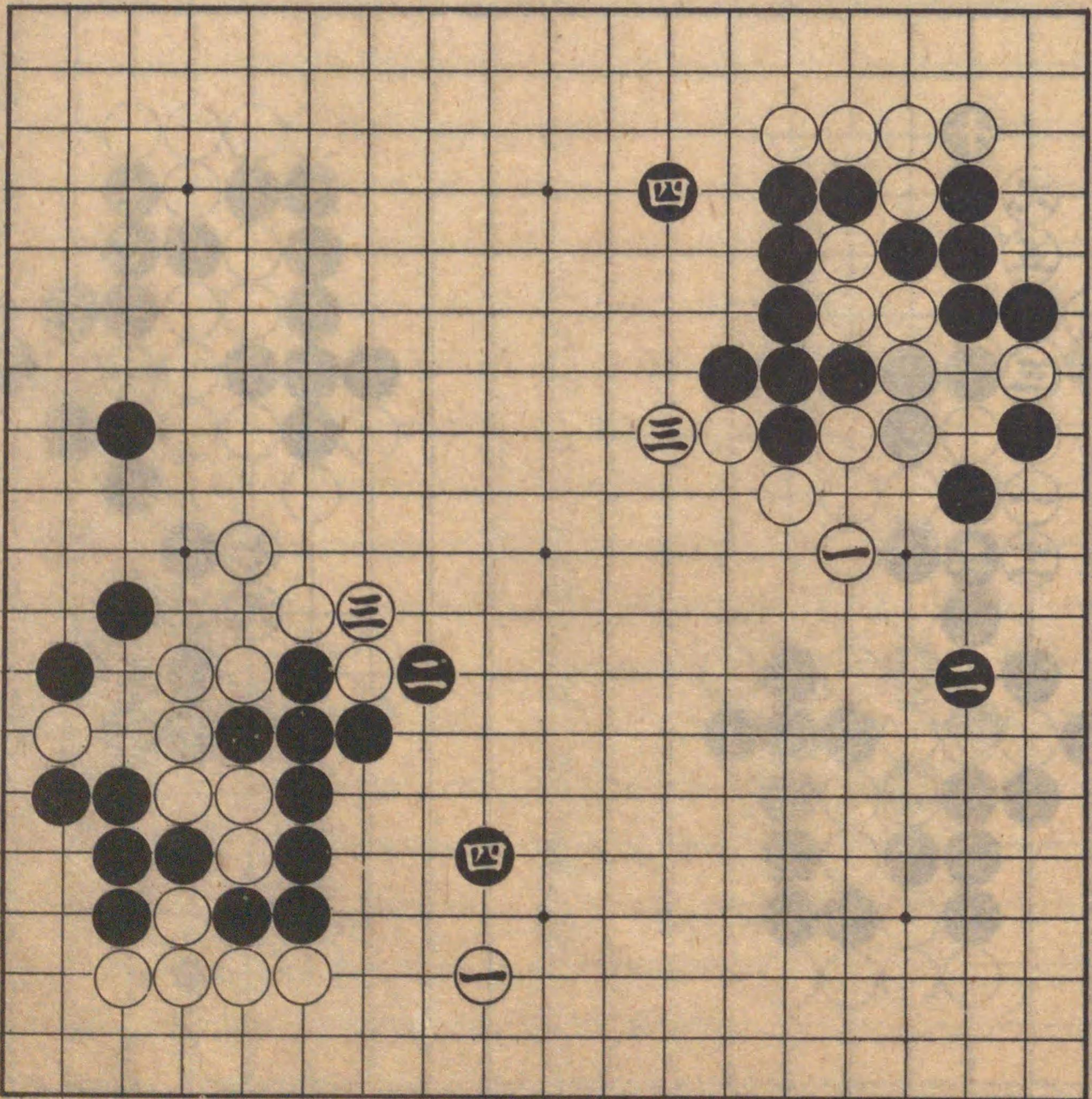
（第三百三十九圖）

第三百四十圖 白一と穩かに掛粘

いで黒二の拆きを容るしたのは、右下隅方面との關係で（例へば黒の勢力がはつきりと在る場合など）右邊の黒を急に攻める望みが無いと觀たものです。

續いて白三黒四となるか、若しくは次圖白一乃至黒四の如き經過を探るか、何れも部分的には得失が言はれません。兩圖に於いて前圖の黒七と粘いだ姿が團子の愚形たる事は争はれないが、それは又第三百三十三圖に於ける黒十一、或ひは第三百三十七圖の黒三の如き飛びの一著を省略し得た所以でもあるので、此の場合には愚形にして實は働いた姿です。

（第三百四十圖）

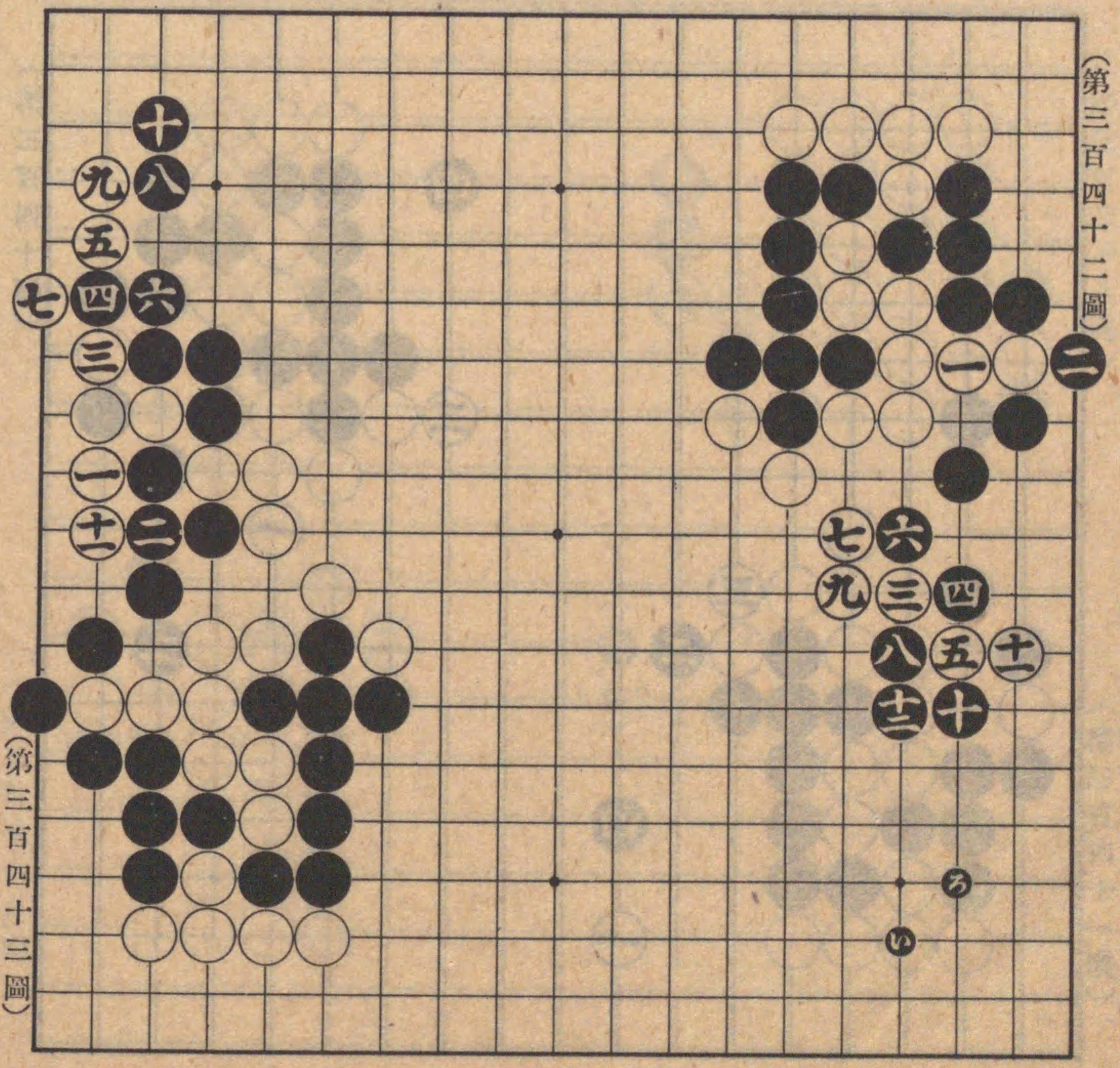


（第三百四十一圖）

第三百四十二圖 前々圖に於ける

白一の手で本圖の如く先づ一と粘ぎ而して三と迫るには前述の様に右下隅方面に黒の勢力が在つては成りません。然るにも拘らず白一、三と若し來れば、黒は四乃至十二と應じて宜しいのです。即ち右下隅に黒⑤、或ひは黒⑥の配置を想定し、白五、十一の二子は味無く取込まれて終ふ。逆に右下隅方面に白の配置が在り若しくは黑白何れの勢力も無き場合とすれば、黒十二に續いて次圖白一乃至十一にて、攻合ひでは黒が足りない事となる。

第三百四十三圖 黒も八の手で十一に約へて置けば取られずに済むけ



れど、それでは上隅を白の爲に充分に打たれる事となり従つて前圖六以下の目的が根本的に挫折する理。

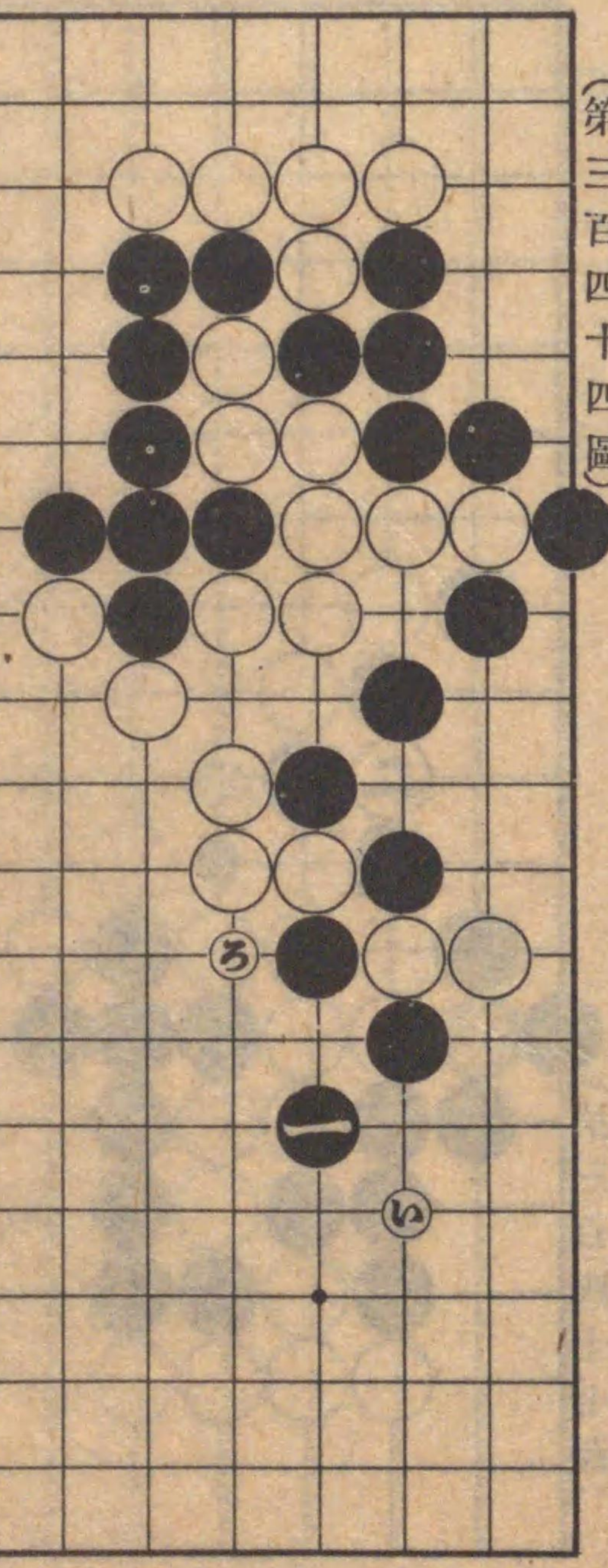
第三百四十四圖 前々圖に於る黒十二を以て本圖の如く一と掛粘げば

右下隅に關係なく白二子を屠つて右邊の安泰を得ます。其の代りに白から⑥、又更に③の當てをも利かせられる具合があるので、必ずしも黒の満足す可き姿とは言へず、否何となぐ厭味の残る形である。

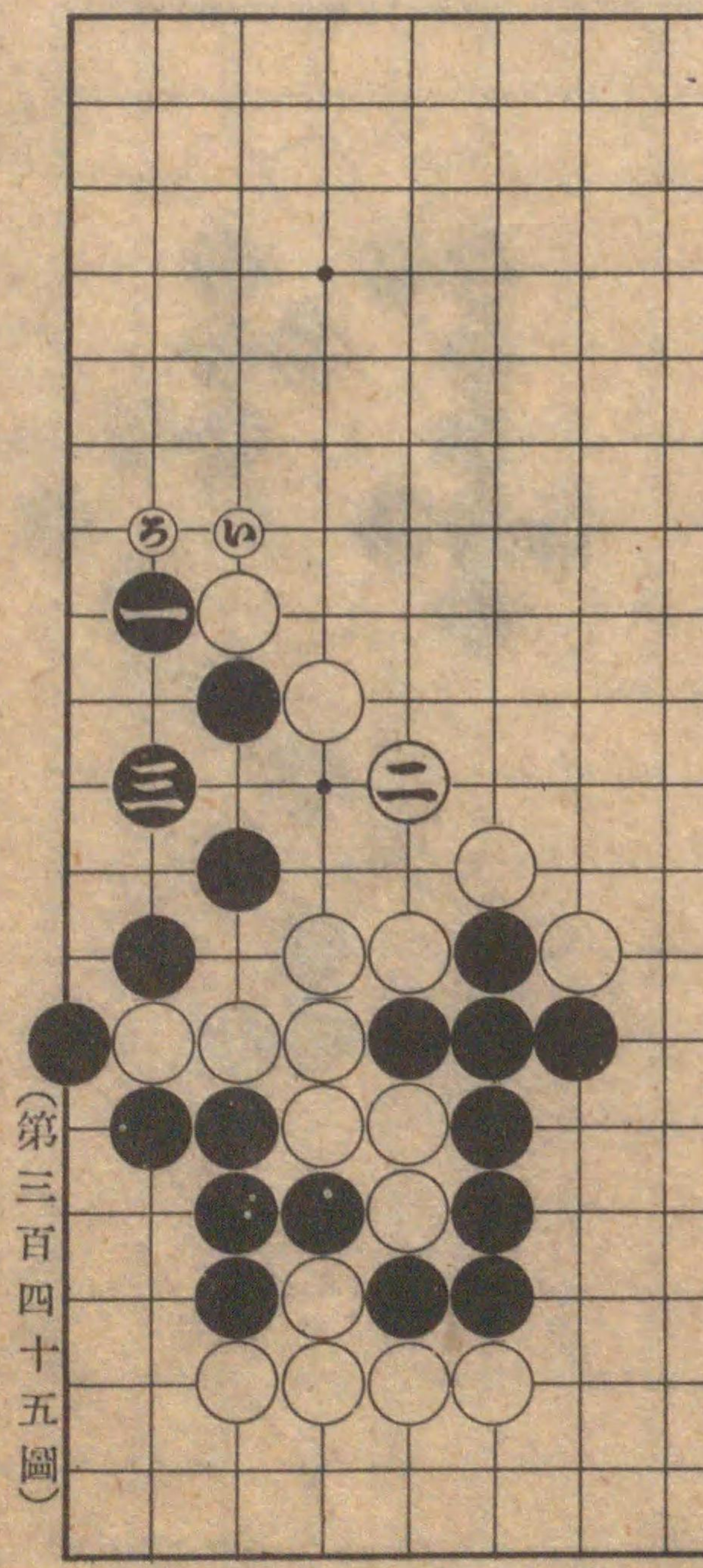
第三百四十五圖 左上隅方面に黒の勢力無き場合、黒としては第三百

四十二圖に於ける六の手で本圖の如く一と二段綽の筋に依り、白は矢張り二と備へる位のものですから乃で

(第三百四十四圖)



三と守つて置けば白⑥は勿論、續く白③も利かず最も堅實な譯です。

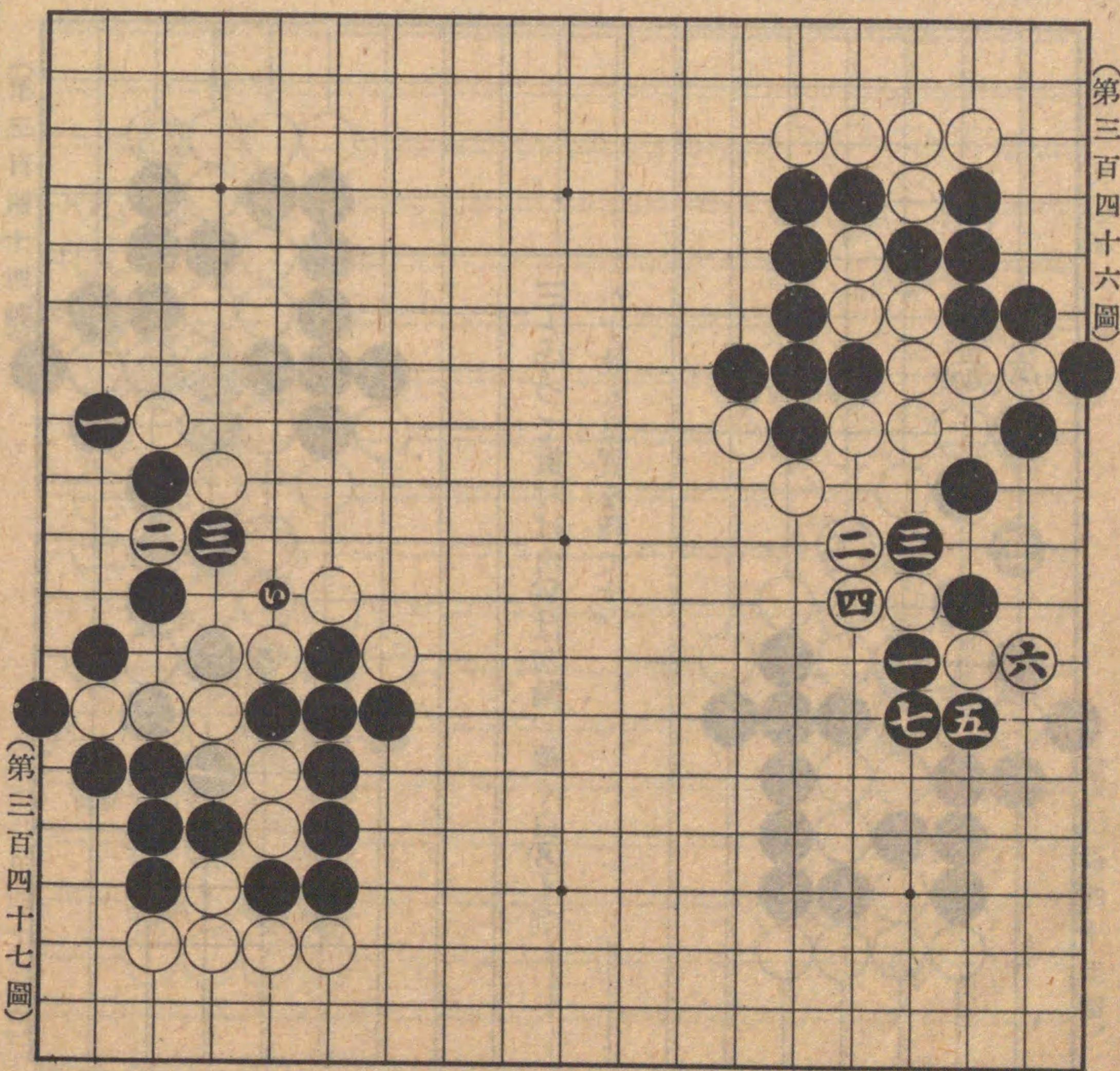


第三百四十六圖 第三百四十二圖

に於ける黒六の手で本圖の如く一と切る筋も無いではありません。然し是亦右下隅に黒の配置が在つて白を取込む事の出来る場合と心得べきである。即ち黒一に對しても白は二と備へる外無いから、黒三乃至七にて第三百四十二圖に歸するのです。白二子を取込み得るからこそ容るされるが、本來黒三（第三百四十二圖に於いては黒六）と當てる形は甚だ好ましくありません。

第三百四十七圖 黒一の二段綽に

對し白二の綽込は無謀に過ぎない。黒三と切られ、次には黒四を生じ忽ち白が窮地に陥ります。



(第三百四十六圖)

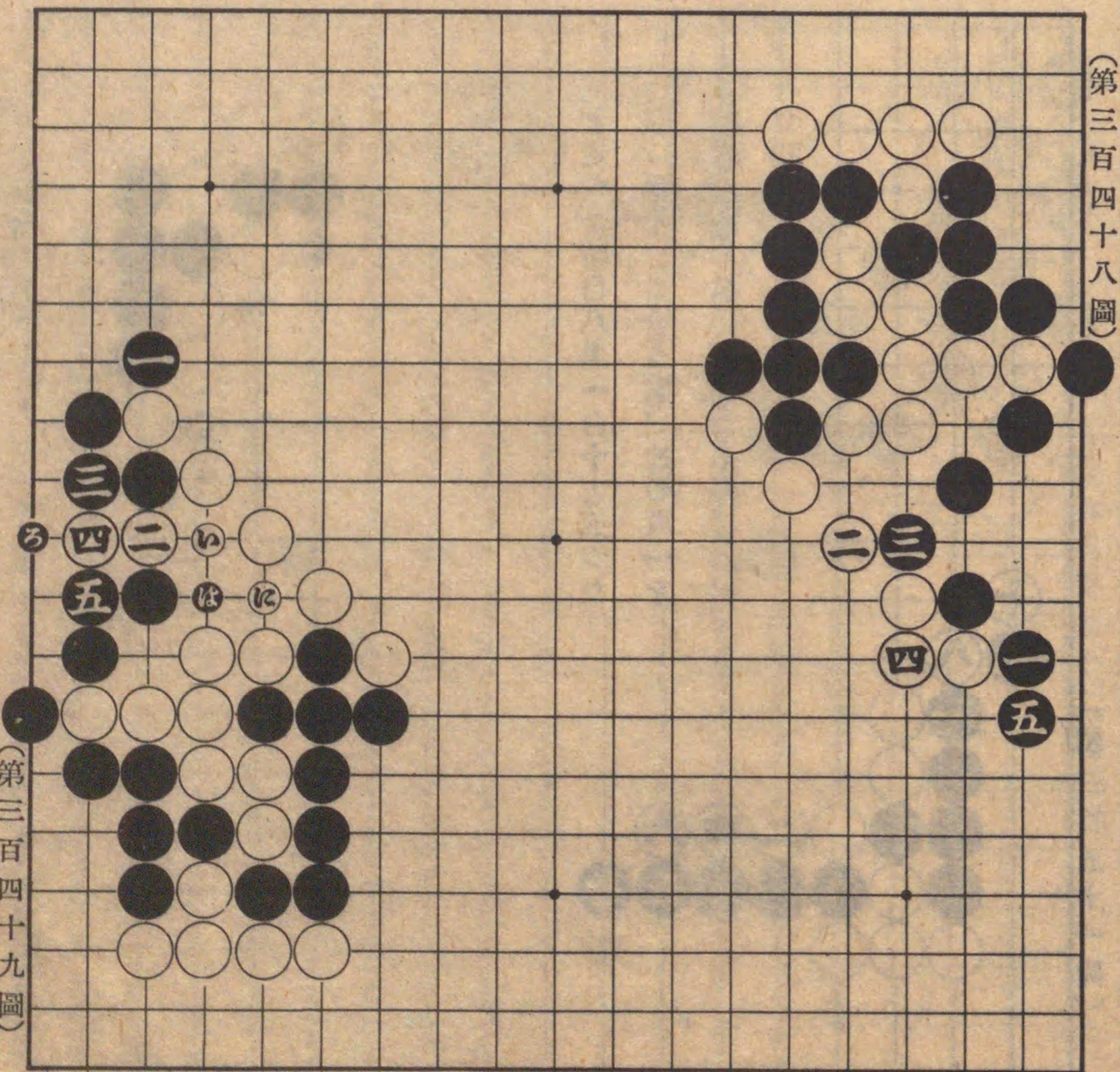
(第三百四十七圖)

第三百四十八圖 第三百四十五圖

に於ける黒三の手で本圖の如く三と當込み白四黒五と行出して良いと説かれた書があるが、講者の承服し難い所であります。本圖は形に於いて黒が不完全であり、第三百四十五圖の味好く治まれるには遠く及ばぬ。黒三が前々圖に於いて排斥した異筋でもあるのを思ふ可きである。

第三百四十九圖 同じく第三百四

十五圖に於ける黒三の手で本圖の如く一と綽上げる事は出来ます。白二及び四に對しては黒三、五と應じ次いで白四黒三と渡り得る。黒五に先だち黒六白七を交換するなどは要なく寧ろ有害無益です。



(第三百四十八圖)

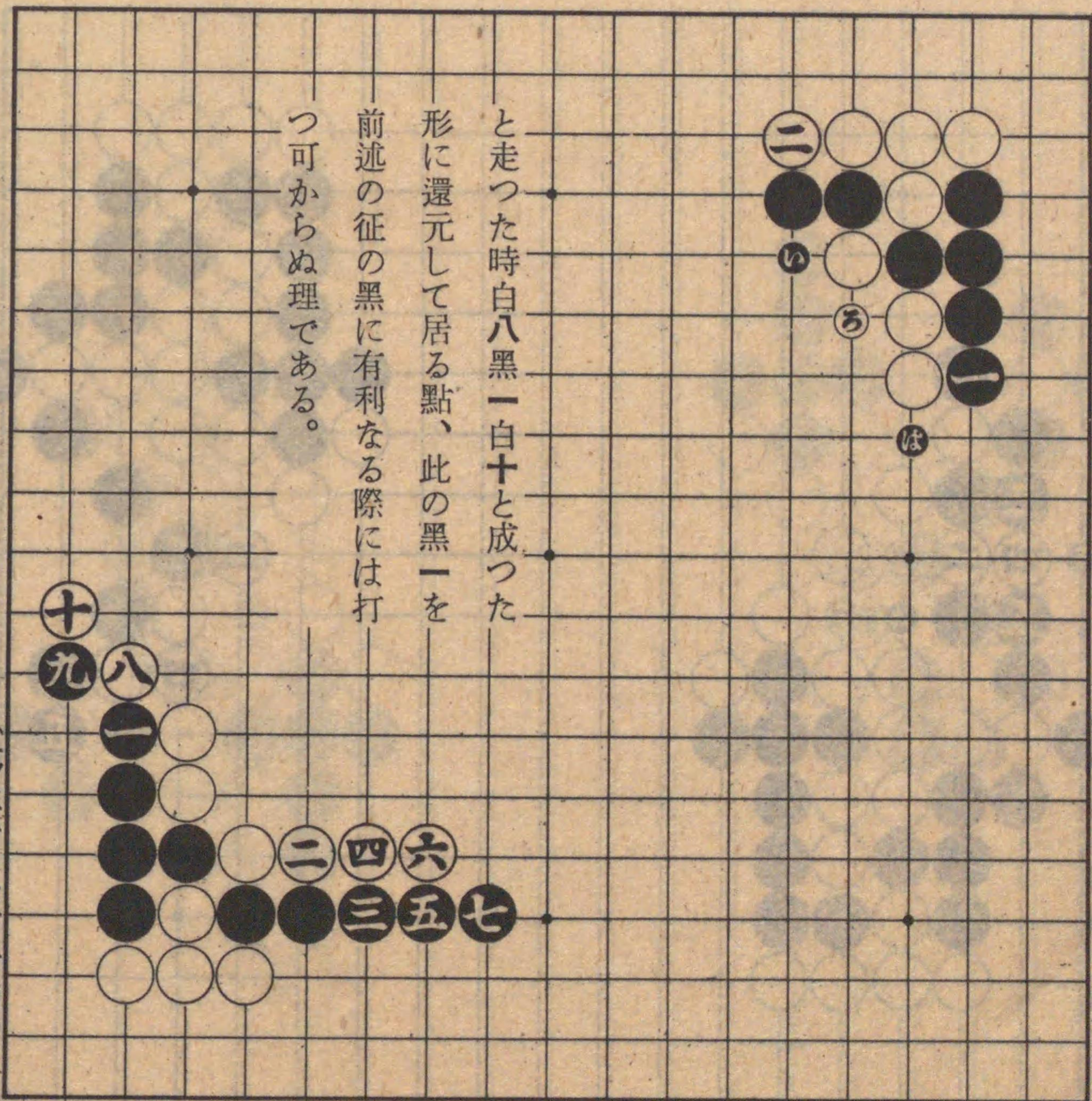
(第三百四十九圖)

(第三百五十圖)

第三百五十圖 第三百三十二圖に於ける黒一と走る手で本圖の如く一と押すのは既に説いた征關係の黒に不利なる場合である。

白一は黒一が走りの際との混同であり、乃ち黒二白三黒四と綽ねられ其の愚形は卒然收拾す可からざるものと成ります。二は次圖の如く上から押すのでなければなりません。

第三百五十一圖 白が二、四、六と第五線を押し黒三、五、七と第四線の不利な交換も、續いて八、十と烈しく二段にに約へ得る所で償はれるのです。第三百三十二圖には此の満足が無かつた。偕白二乃至黒七の事は別とし、初めに黒一と押さず九



と走つた時白八黒一白十と成つた形に還元して居る點、此の黒一を前述の征の黒に有利なる際には打つ可からぬ理である。

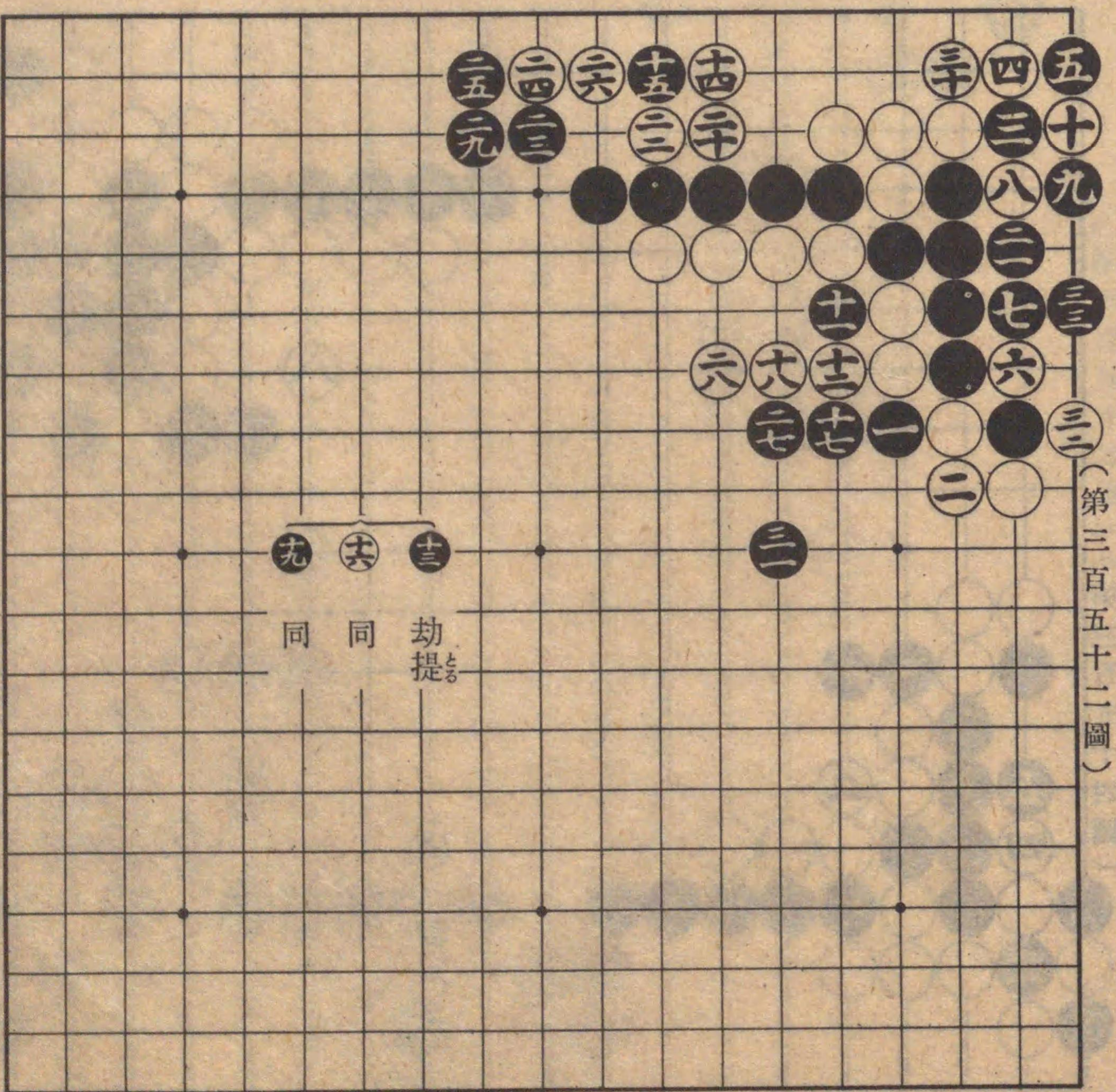
(第三百五十一圖)

第三百五十二圖 前圖に續いて黒

一と切り三、五と綽ねる古來の定型です。白六黒七と交換してから八、十の劫争に入る。第三百五十四圖及び第三百五十七圖参照。

黒十一に就いては次圖参照。
白十四乃至黒三三にて部分的には一段落であります。就中黒二三の尖みの如きは此の型に限らず常用の筋であり、又白三十に就いては第三百五十五、六圖がある。

本圖の如く三十と粘ぐ事に依り次の三三の提りをも先手ならしめるのであつて、後にも明らかなる如く三十の粘ぎは其の實質何目と計算の立たぬ程に大なりと知られ度い。

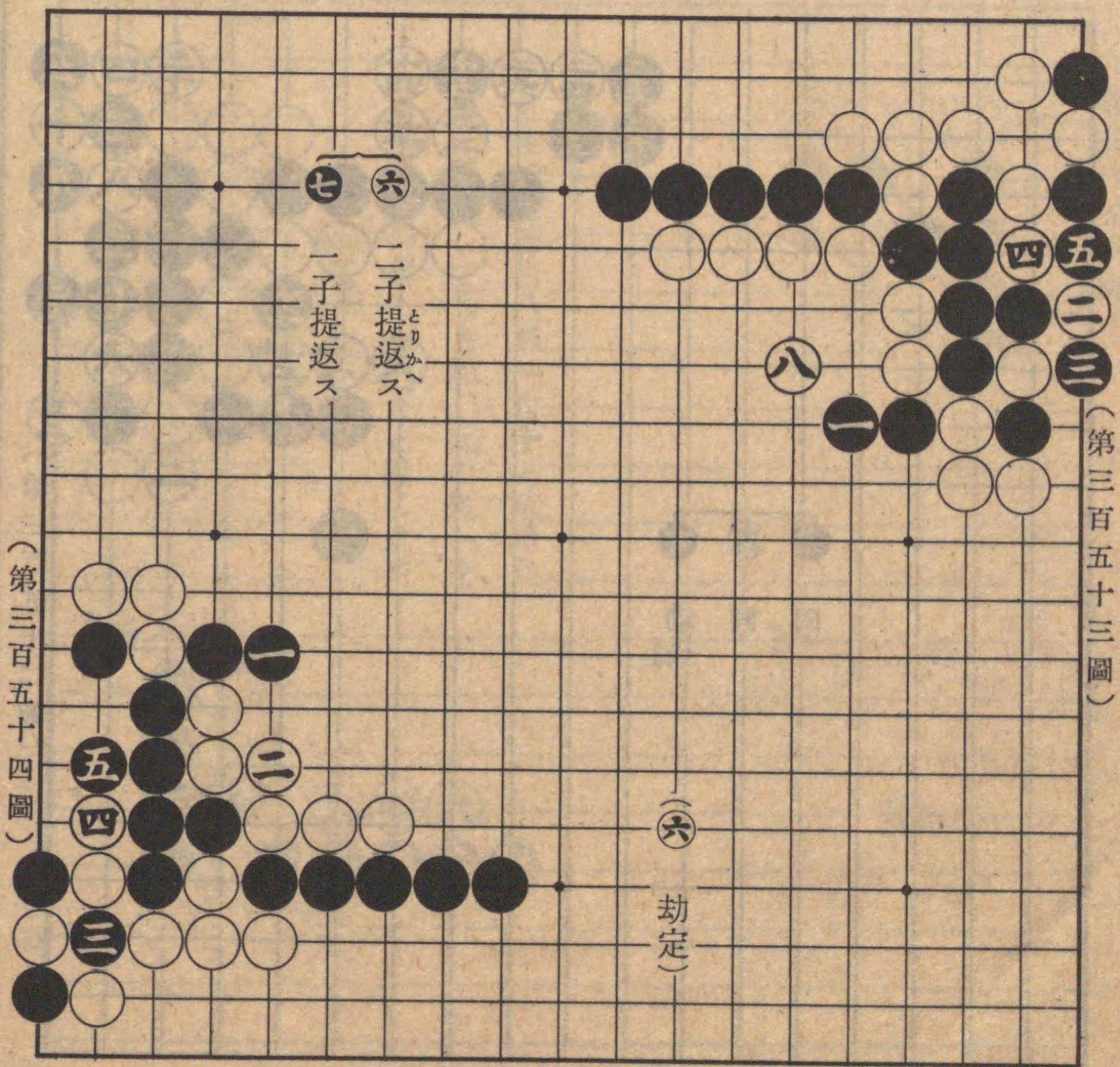


(第三百五十二圖)

劫提
同 同

第三百五十三圖 前圖に於ける黒十一の手で本圖一と單に行びる劫立を以て間に合はせ様としたりすると白二乃至八を以て報いられ劫争の解消と共に黒の全滅に歸します。

第三百五十四圖 前々圖に於ける白六黒七の交換無くして直ちに白が劫争を起すと、黒の最初の劫立として本圖一が成立するかも知れぬと或書に説かれて居るのは全然誤りである。即ち黒一白二と愚形に甘んじて粘れば黒三白四黒五に次いで白が劫を提返した時、續く劫立が黒には有りません。前々圖に於ける白六黒七の交換の意味は決して左様な關係に存するのではない。

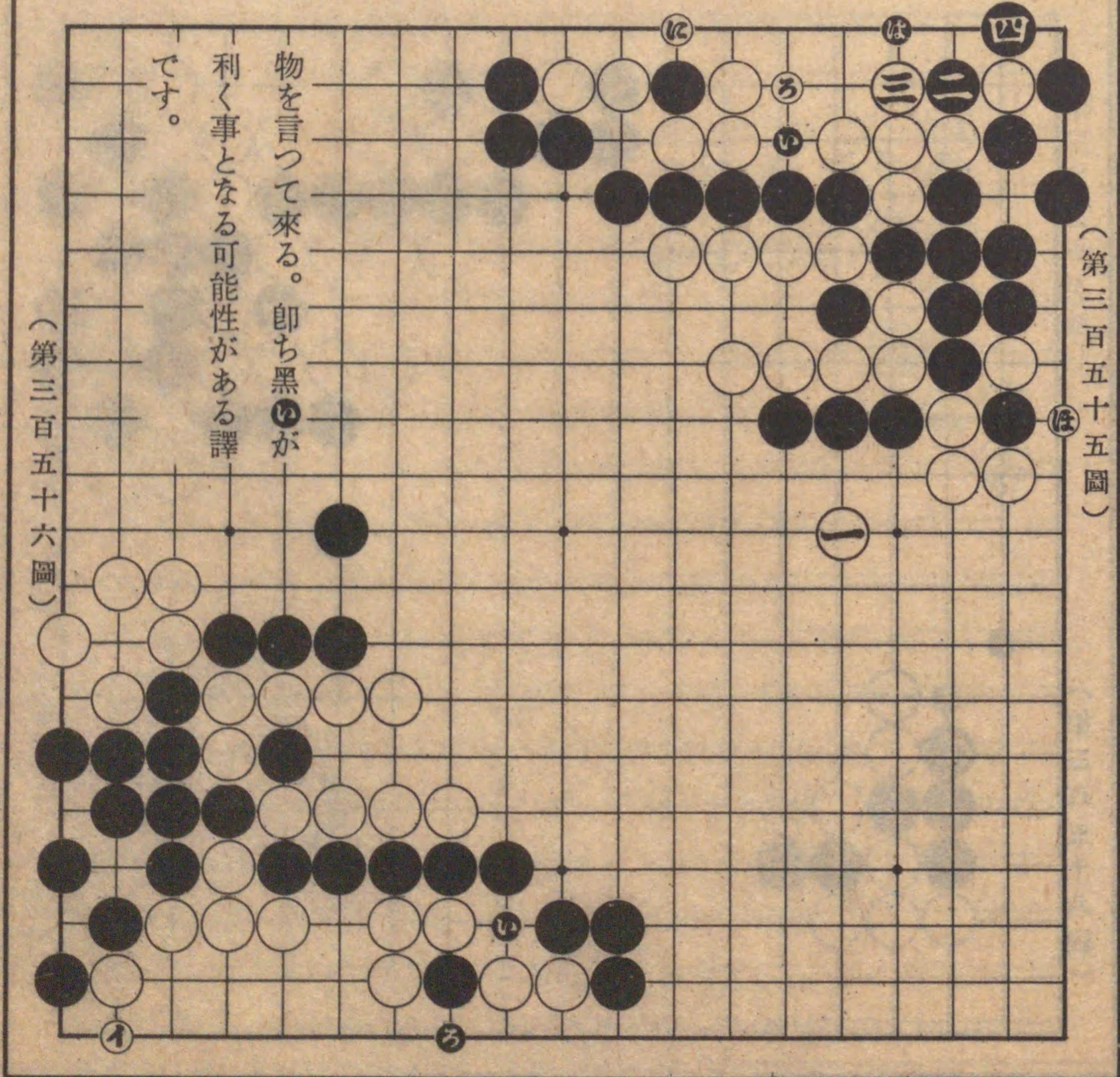


(第三百五十三圖)

(第三百五十四圖)

第三百五十五圖 第三百五十二圖に於ける白三十の手で本圖の如くと打つ場合が無いとは言へません。黒二、四の切提りを然し先手で打たれる事を白は覺悟しなければならぬ。乃ち手を抜くと黒(ハ)白(ニ)黒(ハ)の時白(ニ)と退いて屈服し辛うじて、一半の活路を保つの悲惨を餘義無くされるのです。そののみか黒二、四の後には白(ハ)も先手ではありません。黒二、四の價值、従つて白が二の點を粘いで置く事が如何に大きいかを思ふ可きである。

第三百五十六圖 第三百五十二圖に於ける白三十の手で本圖の(イ)の點に下つてあると後に黒(ハ)から黒(ニ)が



(第三百五十五圖)

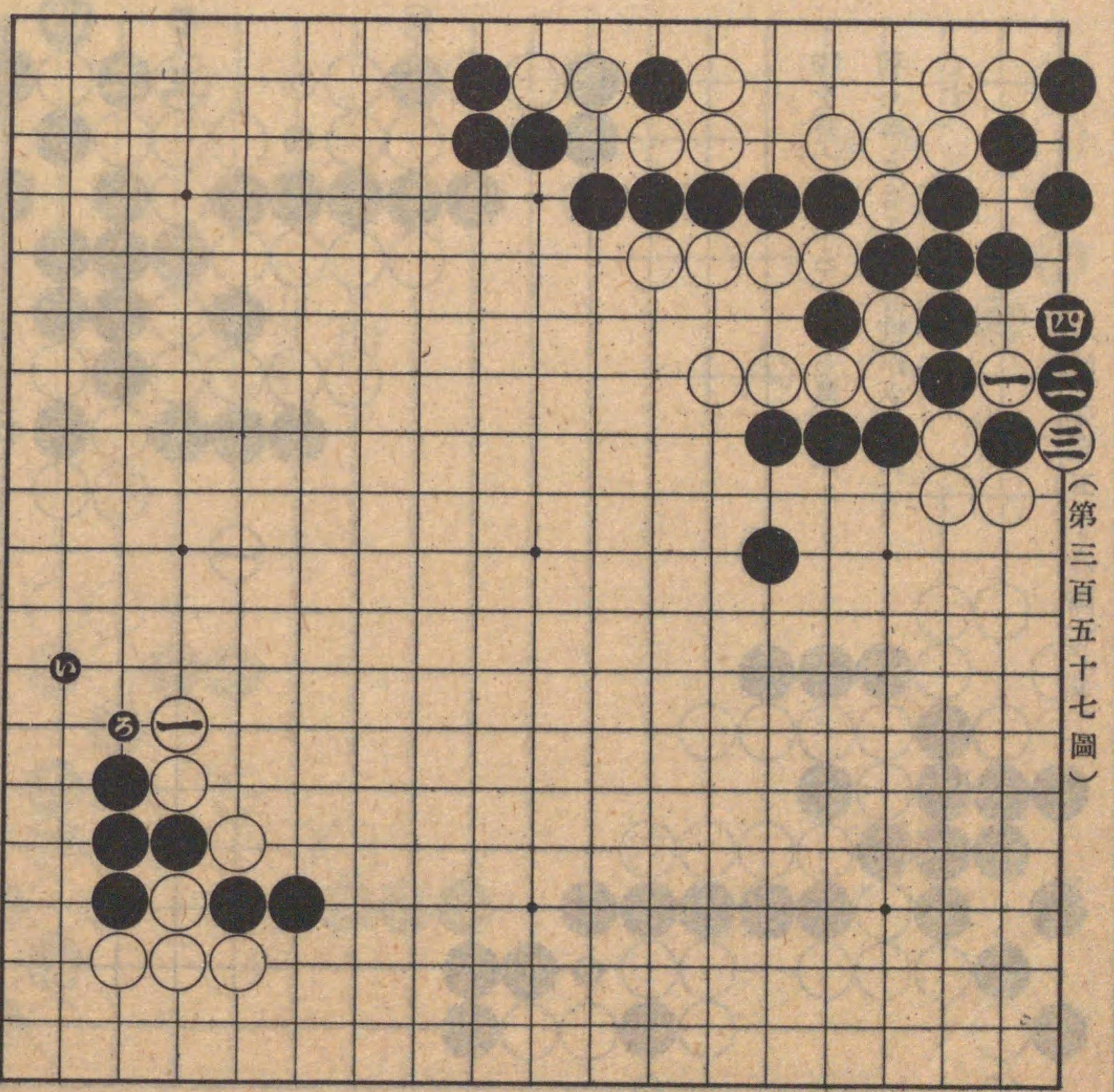
(第三百五十六圖)

物を言つて来る。即ち黒(ハ)が利く事となる可能性がある譯です。

第三百五十七圖 第三百五十二圖

に於ける白六黒七の交換を経ずして
假りに同圖黒三一迄となつたものと
し、然る後に本圖の如く白一と切つ
ても黒二、四を以て報いられると忽
ち右邊の白の眼形に差を生じて來る
事が、同圖との比較に依り知られる
でありませう。同圖に於ける劫争に
は少くとも部分的には白が勝てない
形なのですから、其の意味に於いて
も白六黒七を交換して終つて少しも
不都合は無い理である。

第三百五十八圖 白一に對し黒は
征關係好くば^①と走る可く、誤つて
^②と押すと征關係の有利を空しから
しめる事を牢記す可きであります。



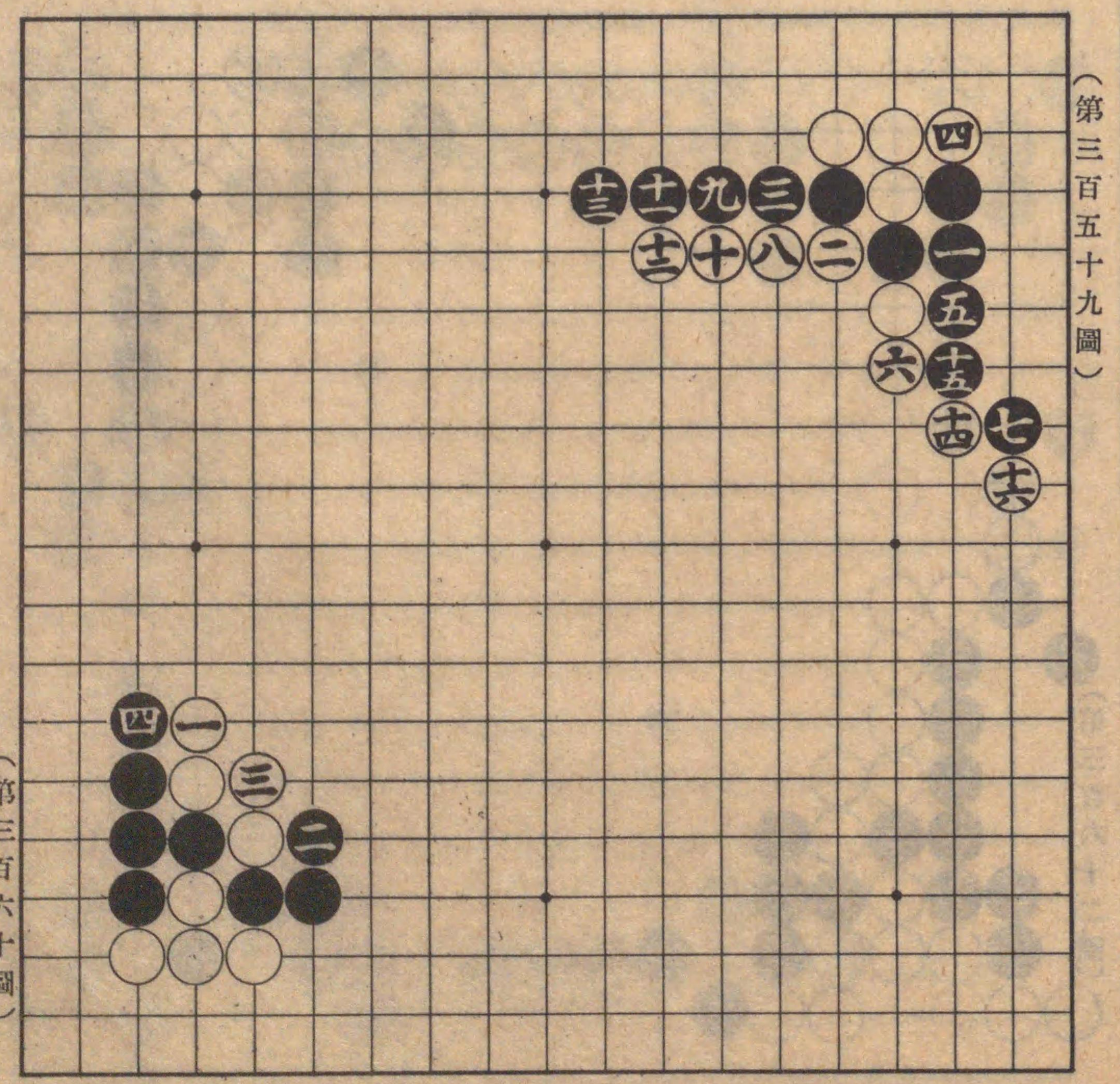
(第三百五十七圖)

(第三百五十八圖)

第三百五十九圖 再三指摘した如

く黒一と下を粘ぎ更に三と行出した
時に難關を通過し得る確信が黒には
無くては成らぬのである。碁前述の
征關係の黒に有利なる場合、白十四
の尖頂けに對しては十五の手で十六
と行出して然るべきを、誤つて十五
と當込み白十六の嚴しい二段約へを
被つたに等しい點、初めに七と走る
手で十五と押す事の不合理を深く思
つて欲しいと言ふのであります。

第三百六十圖 白一に對し黒二白
三と交換し白の形を先づ崩して置い
てから四と押す型は第三百三十三圖
の一と走るに比し烈しさに於いて稍
優り且つはつきりした態度でもある。



(第三百五十九圖)

(第三百六十圖)

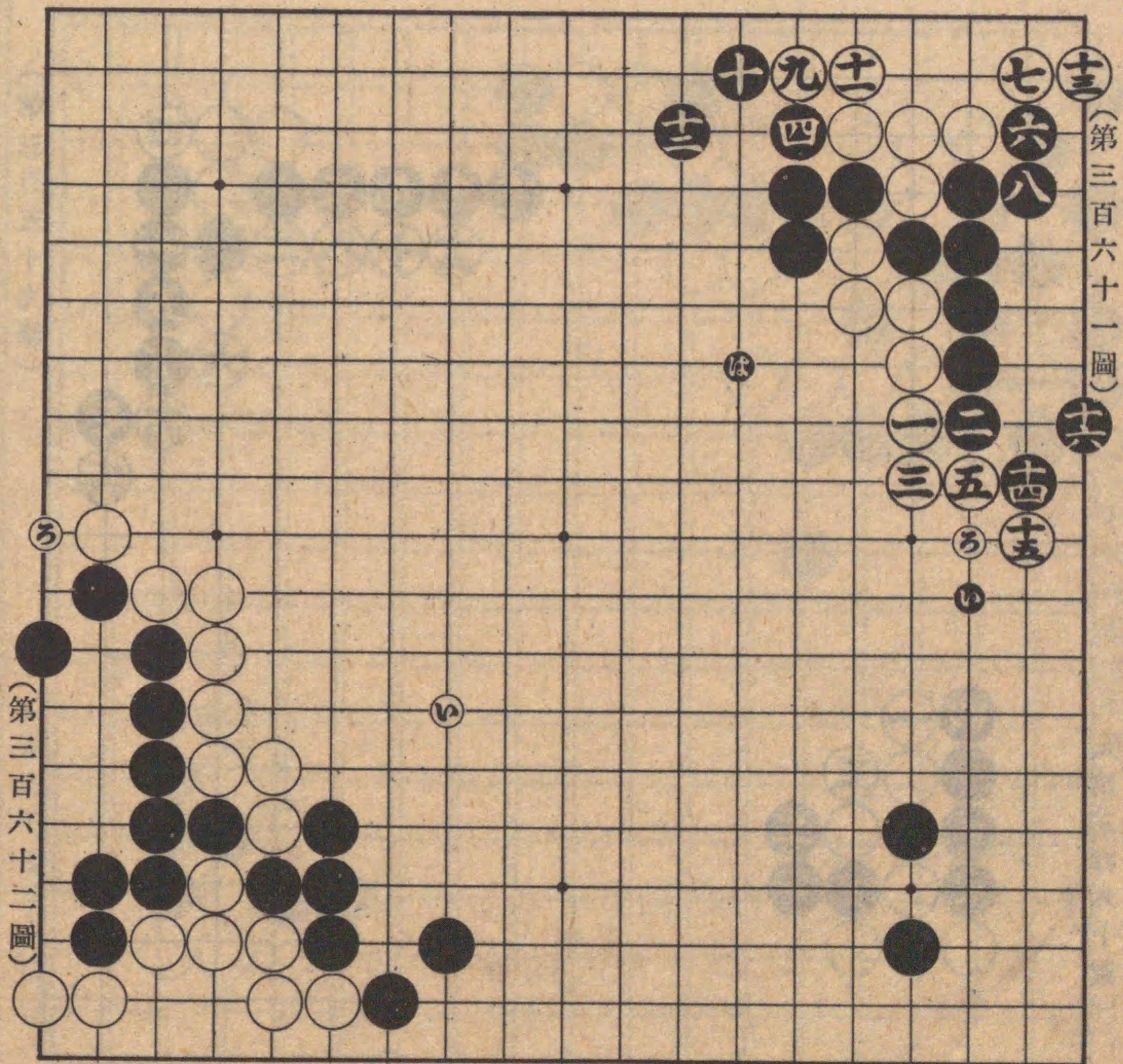
第三百六十一圖 前圖に續きます。

白一の別法は第三百六十七圖以降に示す。本圖の如く白が五迄、専ら右邊の黒に迫つたのは前圖一と行出した趣意を繼ぐものであり黒も四と約込んで前圖二、四の目的を達しました。斯くて黒十六迄の結果、右邊に於いては白が黒を壓迫し得た代りに、十、十二の方は黒に勢力を築かれ白は隅に閉塞されたのである。此の後黒から打つには③を交換してはと斜走するなど好ましい。

第三百六十二圖 右下隅に於ける

此の黒の配置を想定し前圖の後に白から打つには④が要點となります。

白⑤が利かぬ事にも注意する。

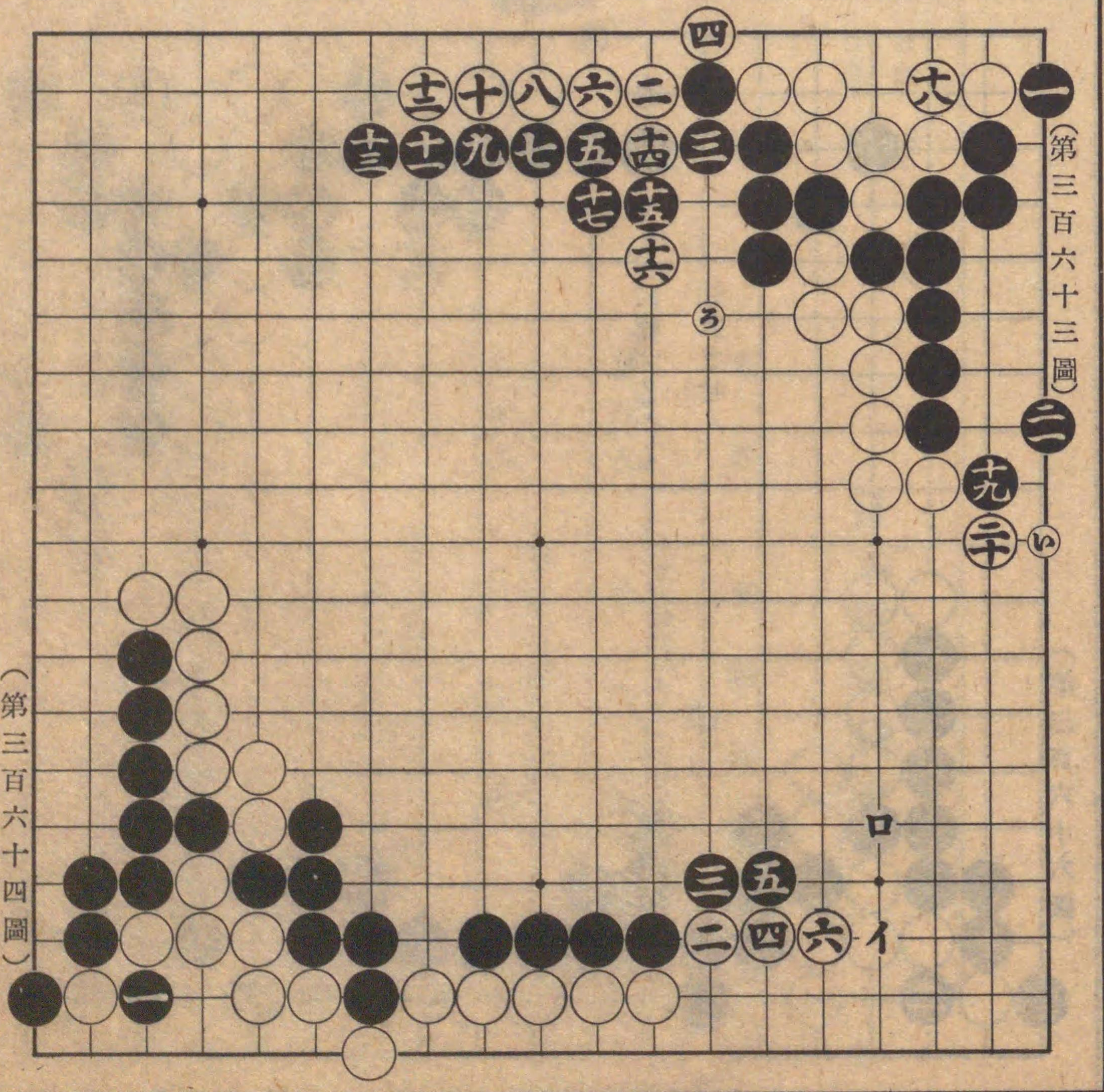


第三百六十三圖 前々圖に於ける

黒十二の手で本圖の如く隅から一と綽ねる變化——白二乃至黒十一の運びは双方絶對であります。白十三に就いては左上隅の配置關係が加はりますが、其の方面と獨立しては本圖黒二一迄にて一段落です。白⑥は依然利きません。又白十四、十六は將來白⑦を含んだ手順である。

第三百六十四圖 前圖に於ける黒

十三の手で本圖一と切れば白二と綽ねられるので、右下隅に黒イ、口とても勢力が在る場合、本圖白四、六となつては黒の失ふ所が大に過ぎる惧れがあります。即ち黒一は二でなければ成らぬ。

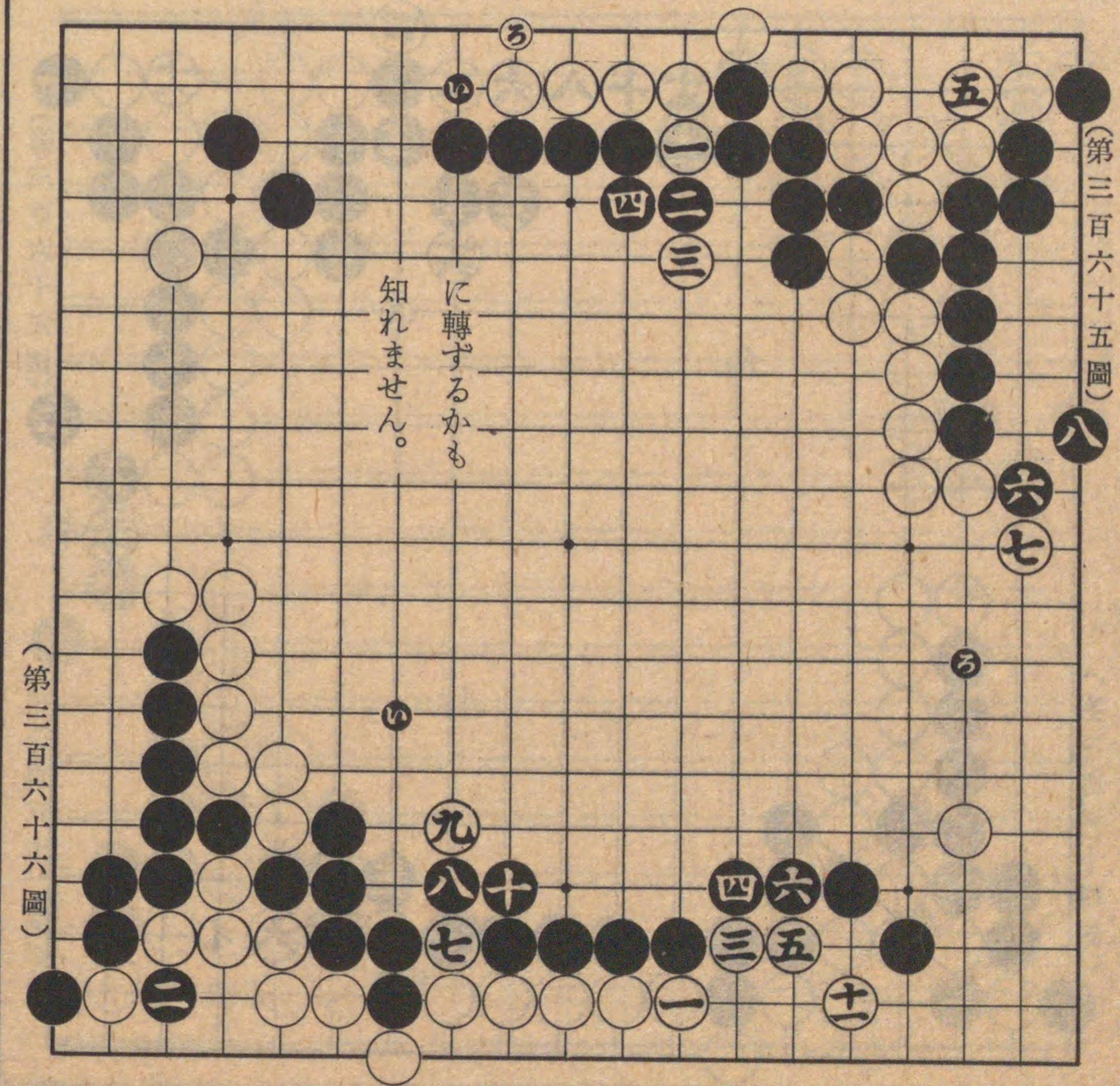


第三百六十五圖 左上隅方面の配

置が本圖の如く黒の小さく又堅固なる場合には前々圖に於ける白十二の手で直ちに本圖一、三を打つてから五と粘いで治まり黒⑤白⑥と受けるに甘んずる。黒④を利かせられる白の苦痛は、左上隅の黒が堅く且つ小さいから大したものでありません。

第三百六十六圖 同じ場合に本圖の如く一と猶も泳ぐと今度は黒二と切られる可能性を増すのです。

即ち白三、五から十一と尖んでも前圖と恰も裏の意味に於いて黒は四、六と應じ小利を失ふに満足す可く、白十一に次いで黒②と進出するか或ひは黒二其の物を省略して他の好點



昭和十二年六月五日印刷
昭和十二年六月十日發行

著者 所有



日本棋院藏版

著者 本因坊秀哉
發行人 小川菊松
東京市神田區錦町一丁目五番地
印刷人 和田助一
東京市芝區芝浦一丁目廿三番地
印刷所 單式印刷株式會社
東京市芝區芝浦一丁目廿三番地

發賣所

東京市神田區錦町一丁目五番地
電話替口二二六・二二七・二二八・二二九・二四〇番

株式會社 誠文堂新光社

